

第3部

誇りのまちづくり 9人のサムライ ～これが、ホントウの共生社会～

■中核にあるのは、変革への意志の力■

福祉や医療にまつわる概念が海外から日本にやってくると、奇妙な運命に遭遇します。だれもがずりりと飲みこめるように、口当たりよく加工されていくのです。その代わりに、ことの本質がぼかされ、その概念が誕生したときの目的がどこかへいってしまいます。ボランティアは「親切な人のタダ働き」に、インフォームド・コンセントは「ICとおきました」と報告するための形式に。

ノーマライゼーションもインクルージョンも、思想のもつ激しさが抜き取られ、「ともに暮らす、やさしさとおもいやり」といった心の問題に変質させられる傾向があります。

そのように確信するのは、1989年からの10年間に、デンマークのニルス・エリック・バンクミケルセン、スウェーデンのベンクト・ニーリエとカール・グリューネヴァルト、つまり、ノーマライゼーション思想の「生みの父」と「育ての父」に会い、3人が共通にもっている思想の核心、「障害をもつ人の権利と社会の責任」「社会変革への強い意志」に触れたからです。

■それは反ナチ運動から始まった■

生みの父バンクミケルセンと初めて、そして最後に会ったのは、89年7月、コペンハーゲンの病院の回復室でのことでした。ノーマライゼーション思想誕生のいきさつはこうでした。

1940年、ナチスがデンマークに侵入したとき、コペンハーゲン大学法学部の学生だった彼はレジスタンス運動「団結デンマーク」に加わり、地下組織の記者となりました。その新聞を配っていたところを見つかり、ドイツ国境に近い強制収容所に収容されました。同志たちの多くは銃殺されましたが幸い生き延び、終戦で解放されました。そして社会省に入り、知的なハンディキャップを負った人のための施設の担当を命ぜられました。1946年のことです。

当時、デンマークには大型の施設が10カ所ほどありました。郊外に建てられており、1カ所に数100人が暮らしていました。諸外国の施設に比べて美しく人道的とされ、海外からの見学者も絶えませんでした。しかし、彼は「なにかおかしい」と感じるようになってゆきました。暴行や虐待があったわけではありません。ただ、毎日が実に単調で、施設の外のふつうの生活と違うのです。集団で食事をし、集団で作業をし、集団で寝る。朝から晩まで同じ顔ぶれ、自由に外に出られない……。

「私が拘束されていたナチの強制収容所に雰囲気似ていました」

54年、社会省に法改正と運営改善の委員会が設けられました。討議を重ね、次第に基本が固まってゆきました。「知的なハンディキャップを負っていても、人格をもち、ふつうに暮らす『権利』をもっている。この人々のために、ふつうの生活条件を創造する『責任』が社会にはある」。この報告書にもとづいた法案が議会を通過しました。ノーマライゼーションという言葉と思想を、世界で初めて組

み込んだ法律「1959年法」の背景には、このような激しいドラマがあったのでした。

■ノーマルな人にするのではなく、ノーマルな生活条件を提供する■



彼は言いました。「ノーマリセーリングはハンディキャップを負った人々を“ノーマルな人”にすることを意味しているのではありません。その人たちを丸ごと受け入れて、“ふつうの生活条件”を提供することです。成人したら親と独立して暮らせるように」「その住まいは、“ふつう”の家庭と同じような大きさと、まちの中につくられなければなりません。寝室は大部屋でなく個室に。食事は大食堂でなく、小人数で。つまり、“ふつうの”家庭のように」「日々の生活のリズム、仕事や余暇や男女交際の条件も、できるだけ“ふつうの”人に近づけるように」



「大型施設の長の中には反対がありました」「実はジャーナリストの影響も大きいのです。彼らが施設の現実を写真入りで報道してくれたおかげで一般国民が事実を知り、世論が改革を支持してくれました。私は役人でしたが、彼らが真実を伝えることを妨害したりしませんでした。私自身がかつて反ナチ組織の新聞記者だったのでですから」

妨害するどころか、バンクミケルセン自身が記者たちをこっそり手引きしたというのが真相でした。

「精神病院のない社会」で精神病の人を支えるシステムをつくりあげたイタリアの精神科医、フランコ・バザーリアの手法とよく似ています。

「本人の権利と社会の責任」の思想は、高齢者ケアの政策にもひろがってゆきました。上の写真は、「寝たきり老人」のお世話の仕方を見つけたくて、1985年にデンマークを訪ねたときのもの。



独り暮らしで、自分では起きられず、オムツが必要な身になっても自宅に住み、お洒落して外出する姿にショックを受けました。同じ時期、日本では、「寝たきり老人は西暦2000年には100万人になる」と信じられ、右上の写真のような風景が、あたりまえに展開されていたからです。

左の写真はデンマークの高齢福祉政策の父、B. R.アンデルセン教授が「我が国の手本にしたい」と感動した富山の「このゆびと～まれ」の風景です。乳癌末期で認知症のお年寄りが、赤ちゃんを愛しげにながめています。制度の壁に何度も阻まれ、でも、それを乗り越え、「共生ケア」という道を切り拓いたのです。

第3部の15人の「サムライ」たちも、誇りを大切にした変革への強い意思をもっておられます。どのように道を切り拓いてこられたか。ご注目ください。 (志の縁結び&小間使い・ゆき)